

# 平成26年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	多治見市立共栄小学校	氏名	安藤 薫
-----	------------	----	------

## 1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

### (特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私はこの研修で子どもたちに伝えたいことが2つあった。1つはガーナに関わる授業から、世界には多様な文化や生活があることや、広い視野で物事を捉えることの大切さを伝えること。もう1つは本研修に参加しようとする自分の姿から、年齢に関係なく何かに挑戦することの大切さや素晴らしさ、何より「学ぶことは楽しい」ということを伝えることであった。実際にガーナを訪問してみて、頭に軽々と物を乗せる姿、道端で様々な物が売られている様子など、子どもたちに紹介したい日本とは異なる文化や生活様式にたくさん出会えた。また、子どもたちの屈託のない笑顔、お餅つきのようなフフ作りや携帯の普及など日本と似た所にもたくさん出会えた。ガーナでお会いした日本人の方々の志の高さや奮闘ぶりも知ることができ本当に濃い研修ができた。こうした内容を授業に組み立て、子どもたちに「世界」や「JICA」を身近に感じてもらえるような実践をしたいと思う。今回の研修を通して多くのことを学んだように、「学ぶことは楽しい」を今まで以上に自分自身が実践していきたいと思う。

## 2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

### (1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

私は中学の時にガーナの人と文通していたことがあり、ガーナの地に降り立った時「あの頃のあの手紙はこんな遠くから届いていたんだ」と感慨深く思った。その次に「日本より涼しい」と驚いた。街で見かける何でも頭に載せて売るパワフルな人達、大勢の人が利用する乗り合いソバス(トロトロ)、沿道で手を振る子どもたちの笑顔、一本路地に入ると未舗装の赤土。自己紹介の時の力強い握手と人懐っこい眼差し。注文したものがなかなか出ないガーナタイム。水道・ガス・電気を使わない昔ながらの生活。ガーナの人たちの「カクラカクラ(ゆっくり、ゆっくり。まあ、いいかっという感じ)。どれもとても新鮮だった。帰国してトイレに入った瞬間たくさんのボタンや液晶モニターを見て「ここまで必要か?」と日本の便利で快適な生活に疑問を感じた。子どもたちと「本当に必要なもの、無くてもいいもの」を考え合いたいと思った。

### (2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

日本とガーナのつながりで一番心に強く残ったことはJICAの方々の活躍ぶりである。大勢の日本人が「ガーナの人生活を良くしたい」という志をもってこんなにも活躍してみえることを初めて知った。そしてどの方もガーナの人に信頼されている姿に感動した。おこがましいが同じ日本人として誇らしい気持ちにもなった。私は今まで、国際協力というと、ODA 援助や政府への資金援助といった国と国というイメージが強かった。しかし今回研修に参加し、支援を求める場所の最前線で日々頭や体を動かしているAさんと現地の先生、Bさんと農家の方といった、人と人がつながっていくことが本当の意味で国際協力なんだと感じた。また、野口

英世の時代から脈々と続く研究や援助といったつながりにも感動した。さらには遠くアフリカの地にいることを忘れそうなくらい日本に似た水田や山々などの風景。米の収穫量が増えたと話す農家の人々の笑顔。日本とガーナは似ているなあと感じた。

### **(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から**

学校訪問を通して、ガーナの子どもたちや先生と出会い、改めて教育が未来を築く希望であることや、教師という仕事の可能性や責任を感じた。日本とガーナの経済状況等の違いはあっても、どちらの国でも子どもたちが将来に夢や希望をもつことができるような社会を築いていくことが大きな課題であると思った。また研修中全く異色だったケープコースト城の奴隷貿易の過去を学ぶ時間。現地ガイドさんが最後に言った「本当に奴隷貿易は終わったと言えますか？人権侵害はなくなったのでしょうか？」という言葉。私たちは世界の様々な歴史から学ぶことで、未だに残る差別や人権侵害を少しでも無くすよう努力していかなければいけないと強く思った。

伝統的な箒で掃除をするきれい好きなガーナ人ということだったが、道にゴミが散乱していたり、人気のない所にゴミが山積みになっていたりするのが気になった。日本がかつて公害を克服したように、ガーナの人に環境保全技術を伝えていくこともこの先大事だと思った。

## **3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」**

今回のような教師海外研修という制度があることが「良い!」と思う。普通の旅行では訪れることができない場所や人と出会うことができ、この研修は本当に有意義な時間であった。研修をサポートしてくださったJICA事務所の皆様や、青年海外協力隊の方々本当に感謝の気持ちでいっぱいである。残念なのはあまりこの研修やJICAそのものが自分の回りではあまり知られていないこと。今後微力ながら周囲への広報活動をしていきたいと思う。

またガーナにおけるJICAの支援は道路、稲作、教育など、どれも本当に大変な苦勞と努力の連続で今に至るのだと思うが、見事にどの活動でも具体的な成果が出ていた。その結果、JICAはガーナの人達から厚い信頼を得ていた。常に相手の立場に立った支援、手間や時間を惜しまず現地の方にとって持続可能な方法であるかという視点で支援を貫かれているからこそだと思った。今後もガーナの人の心に寄り添った支援（環境保全技術に関する支援も）続けて行ってほしいと思う。

## **4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」**

### **② マリナモール**

ラマダン明けで人が多くて治安が心配ということで、アクラモールの予定が変更になった。アクラモールもマリナモールも近代的なショッピングモールで、今回訪れたマリナモールの方が規模が小さいとのことだった。翌日の飛行機移動が早朝なので、ホテルで朝食を食べられない場合に備えてモールの中のスーパーで食品を買うこととなった。モールの入り口にはたくさんの自家用車やタクシー。マイクロバスから自分達が降りるとタ

クシー運転手らしき人が声をかけてくるが足早にモールに入る。モールの奥がスーパー。入口で大きなカバンは預けるシステムだが、短時間なのでスーパーに行く人とカバンを見ている人に分かれて動く。ざっと商品を見て回った感想としては、食料品から日用雑貨まで品数は揃っている。チョコレートは輸入品が多い。セディーで日本円に換算すると…慣れない計算にちょっと戸惑う。輸入品は日本より高く、パイナップルなど地元でとれたものは日本より安い感じ。モールもいいが地元の市場も見てみたくなった。(安藤 薫)

## ⑧ JICAボランティア、専門家との懇談会

これまでにお世話になったクマシで活躍する JICA の専門家 1 名、青年海外協力隊の方 2 名、シニア海外ボランティアの方 1 名と一緒に中華料理店で懇親会が行われた。昼間はそれぞれの研修先で活動の説明をしていただいたり、私達が質問したことに答えていただいたりした。そこで懇親会では逆に私達が JICA の 4 名の方から「研修に参加したきっかけ」「ガーナの印象」「日本の子に伝えたいこと」という質問をいただき、一人ひとりが話した。懇親会は終始リラックスした感じで、JICA の方々の今に至る経緯もじっくり聞くことができた。JICA の方々とうこうした時間を過ごす中で、世界で活躍する人は志や信念、語学や専門知識・技術ももちろん大事だが、どこでもしっかり食べることができ、誰とでも笑顔で接することができるという人なんだとしみじみ思った。帰国したら日本の子ども達に、ガーナについてはもちろん、ガーナで活躍する素晴らしい日本人についても紹介したいと強く思った。(安藤 薫)

## ⑩ ケープコースト城

ホテルから移動する車中は、世界史の先生による奴隷貿易に至る歴史の復習タイム。そしていざ城へ。ガイドさんの話を英語の先生が同時通訳。城の地下は暗くて湿っぽい。この土や壁には、奴隷としてつれてこられた大勢の人の悲しみ、苦しみ、怒り、無念さがしみ込んでいると思うと本当に胸の詰まる思いがした。特に女性に対する仕打ちは、同じ女性として言葉にならない屈辱的なものだった。博物館には奴隷と交換された品々や奴隷を売る広告もあった。ガイドさんによると、ガーナでは学校で奴隷貿易について学ぶ機会はあるが、学校に行っていない子もいるし、学ぶ内容も学校それぞれらしく、どの程度ガーナの人が理解しているかはよく分からないそうだ。また見学には世界各地から大勢の方が訪れるが、国や人種によって受け止め方に違いがあるそうだ。自分自身の受け止め方も歴史を勉強することで変わってくると思う。帰国したら世界史の先生から紹介された「砂糖の世界史」からもう一度奴隷貿易について勉強しようと思った。(安藤 薫)

## ⑩ チョコレート工場

工場に着くと最初に目に飛び込んできたのはカカオが貯蔵された高くそびえる塔。その荘厳さはお菓子工場という感じではない。しかし車から降りて敷地を歩くと、そこかしこから漂うチョコレートの甘い香り。「ああ～幸せ」と思わず笑みがこぼれる。工場内に入るためにネットをかぶり、白衣を着る。まずは農家から運ばれてきたカカオから不純物を取り除き、加熱・粉砕する過程を見る。皮は輸出して肥料にするそうだ。次に液体となったカカオに圧力をかけてカカオバターを絞ると、残りはカカオパウダーになるということで、無駄にするものはない(トラックからカカオを移動させる床には大量のカカオが落ちていたが…) という説明だった。

工場内はほとんどが機械化されていた。工場では材料の配合を変えて国内用と輸出用のチョコレートを作っていた。国内用は高温でも解けない配合で、食べ比べてみると輸出用の方がなめらかだった。どちらのタイプも本場の「ガーナチョコレート」は日本のものより甘さ控えめであった。(安藤 薫)

## ② JICA ガーナ事務所報告会

報告会では一人5分程度で今回の研修で学んだことを発表した。同じ日程の研修を受けても、一人ひとりの思いや感じ方はやはり少しずつ異なるものだと思われ、仲間の発表を聞いて思う。しかしどの人にも共通していたのが、ガーナで活躍する JICA の方々から受けた感動や尊敬の気持ち、今回の研修に対する様々な配慮への感謝の気持ち、そして帰国したら必ず子ども達に JICA について熱く語るという決意だった。最後に JICA の方から子ども達に「楽しいガーナ」「ありのままのガーナ」を伝えてくださいとエールをいただき報告会は終了となった。発表内容は事前に考えていたものの、いざ話し始めると研修で感じた様々な思いが湧いてきて、思いがけず涙腺が緩み全くとまらなく話せなかった。それぐらい今回の研修が充実したものだと思われ受け止めていただけたらと思う。同時に研修で学んだことをしっかり教材化し、子ども達に還元するという自分たちの使命を改めて強く認識した。(安藤 薫)

## 5. 印象に残る写真2点 とその解説

### ●写真1…ファイル名 [AND\_0213]

◇キャプション： 満面の笑みで手を振る子どもたち

◇解説文（写真の背景やその写真に対する思い）：

学校訪問後、村を歩いていると「あんどぅ〜！」と私を呼ぶ声。声の主は人懐っこいガーナの子どもたちでした。日本の子どももガーナの子どももそういう所は一緒だなあと思いました。



### ●写真2…ファイル名 [KZE\_0984]

◇キャプション： ケープコースト城のガイドさん

◇解説文（写真の背景やその写真に対する思い）：

ここで奴隷貿易が行われていたという事実。暗く湿った地下牢。どれだけの人の怒りや悲しみ、絶望が染み込んでいるかと思うと胸の詰まる時間でした。



## 6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

ガーナの持ち物で一番気をつけたのはマラリヤ対策。虫よけジェルやスプレー、ワンプッシュの虫よけスプレー（12時間有効）、手足に使うリング、電池式蚊取り線香、虫さされ薬は安心のために多めに持った。ホテルには電気式防虫マットもあった。JICA 事務所のオリエンテーションでエアコンの温度を22度以下にすると安心だと聞いた。自分はクマシのホテルのロビー以外では蚊を見ていないが、ホテルの部屋で刺された人も

いたのでマラリヤ対策は日本でできるだけした方がいいと思った。日本より涼しく、いつも長袖の上着を着ていた。寝る時も長袖長ズボン、靴下。服は多めに持ったが、部屋干しで十分乾いた（エアコンを一晩中22度設定）ので着なかったものも多々あった。自分はどの食べ物もおいしく食べられたが、辛くて食べられなかったり、体調を崩したりした人は日本から持っていた食料が大いに役立っていた。

学びの視点では、教材として集めてこようというものをすべてを持ち帰ることは当然できなかった。もちろんチームとして大量の写真や動画を持ち帰ったが、やはり「もっとこうすればよかった」といった思いは残る。その思いを少しでも軽減させるためにも、日本で事前にチームの仲間といろいろ考えて（考えても実際行ってみないとわからないことだらけだが）行くことは大事だと思った。

研修中は常に集団行動である。集団がゆえに計画より時間を押してしまう場面（トイレが一つしかないとか、お土産屋さんのレジ待ちなど）がある。それでもみんなで和気あいあいと過ごしていく。まさに「カクラカラ」の精神が大事だと思った。

## 7. その他全般を通じての感想・意見など

今回研修に参加させていただき、JICA と NIED・国際理解教育センターの皆さま、一緒に参加した先生方のおかげで貴重な体験をすることができました。旅行では絶対に知ることのできなかったガーナ、国際協力の実際を見る事ができ、本当に有意義な研修となりました。事前によく考えられたマナビノオト、昨年度の研修報告や参加者からのアドバイス等の資料をいただいたことで、学びも準備もスムーズにできました。

自分の周りでは JICA でこんな素晴らしい研修が行われていることを知らない先生も多くいます。今後、開発教育指導者研修、教師海外研修の素晴らしさをより多くの人に紹介したいと思います。何より研修で身に付けたことを、子どもたちに還元できるよう、学校での実践を頑張りたいと思います。研修を支えてくださった皆さま、本当にありがとうございました。

以上